

巻頭言

「エイプリルフール・四月馬鹿」

理事長 新谷友良

「エイプリルフール」、「四月馬鹿」という言葉を最近あまり聞かなくなりました。イグノーベル賞の持っている滑稽感をもっと軽くしたような語感で、割合と好きですが、差別語なんのでしょうか、それともフェイクニュースに押されて、影が薄くなったのでしょうか。

そのようなこととは無関係に、「エイプリルフール」でも「フェイク」でもなく私の誕生日は4月1日です。小中学校の学齢は、各学年4月2日から翌年の4月1日まで、いつも同学年の最後に誕生日が来るので「みんなにいじめられているのではないかと心配した」と母親から聞いたことがあります。そんな心配を横に、とくにいじめを受けることもなく小学校、中学、高校を過ごしましたが、周りに4月1日生まれはおらず、大学では同級生の多くが20歳の成人を迎える中、なかなか成人にならないで飲酒・喫煙の悪癖に染まりました。

会社に入るとたまたま同じ職場に4月1日生まれが2人いました。ほぼ同世代で、業務が違ったので親しく話しをすることはあまりありませんでしたが、そのうちの一人が「生まれたころはまだ戦後の大変な時期。子どもが家にいても、親は構ってやることができないので、早く学校に入れたがっていた。それで、4月1日を過ぎて生まれても、4月1日生まれにすることは、俺たちの周りには結構あった」といっていました。苦笑いする内容ですが、なんだか身につまされたことがあります。

「底抜けに空青き四月馬鹿の日よ（村山故郷）」、4月1日は入学式や入社式などもあり、ものみな新しく、正月と同じように華やぐ季節です。とくに、晴れた日の青い空と満開の桜は、月並みな構図ですが、本当にきれいと思います。若いときはそのような感慨を持った記憶がありませんので、年齢を重ねて感じる部分があるのかもしれませんが。「四月馬鹿」の自嘲と労りを感じさせる俳句を2句選びました。

四月馬鹿手紙が来る四方より 山口青邨
四月馬鹿幾度肝胆相照らし 中村草田男